

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 教育学部理科専修2年

氏名: 好田 智紀

| | |
|---|--------------------------|
| 授業科目名 | 理科教育特講 |
| 研修先(国・地域) 滞在地 | ドイツ連邦共和国 |
| 研修期間 | 平成29年 2月 18日(土) ~ 28日(火) |
| <p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>ドイツ訪問を通して感じたことや学んだことはいくつかある。まず1つ目はドイツの大学についてである。ドイツの大学には教育学部という教養の学部はなく、理学部や工学部の学生が授業として教育に関する内容の授業を受けるというものである。なので教育学部にはいる必要はなく、理系なら理系の職業を大学に入学後決めることができるということである。また授業の1つに小学校のクラスごとに子どもたちを大学に招き、実験や観察を通して理科の面白さを伝えるという内容の講義もあり、とても関心を持った。またその内容も日常生活で疑問に思うことや不思議なことを題材にしているので子どもたちにとってもいい経験になると思う。日本の大学でもこのような活動を、授業を通して行くと学生にも生徒にもいいけいけんになると感じた。またドイツの授業形態について、今回見学した授業では3つのグループに分かれてそれぞれ異なる問題を解き、その内容についてみんなにプレゼンを行うというものであった。日本の学校の授業は教師が一方通行で生徒に授業を行い、生徒はノートを書くことがメインである。しかし今回の授業は、生徒が主体となり、みんなに自分の班の考えや意見を伝え、先生が生徒の考えや意見をより詳しいものにするために発問やヒントを与えるというものであった。またそのような授業を行うことで生徒自身が考え、意見を述べるという技術を身につけることができると学んだ。日本では行われていない方法であり、真面目にやらない生徒がでてきたりするので、工夫する必要もあるということも学んだ。次にドイツの学校と日本の学校について小学校、中学校、高校と分かれているのではなく、学習段階に応じて生徒のクラスが科目ごとに毎回異なり、また1つの学校に幅広い年齢の子どもたちが通っていたことである。中学校段階の化学を見学したが、クラスに入ると小学生がいたり、高校生みたいな子どもがいたり、学習段階によりクラス編成が行われていた。また次に授業時間に違いがみられた。日本の小、中学校では1コマの授業は45分であり、それぞれ10分の休憩がある。しかし、ドイツの学校は1コマの授業が90分であり、間に5分休憩があるという形態である。ほぼ日本の大学と同じ授業時間であり、生徒が授業に集中できるように授業を行う必要があると感じた。</p> | |
| <p>〔研修後の抱負〕</p> <p>ドイツ研修を通して見つけた課題があった。まず1つ目は教育内容についてである。日本とドイツでは小学校、中学校段階での授業の形態が異なり、自分の中ではドイツでの授業の方が、内容が濃くより詳しい内容の授業を行なっているように感じた。4日目に中学、高校段階の学校を訪れ、生徒たちの選択授業の1つとして技術の授業を見学したが機材も日本より優れ、専門の教師のもとで生徒が自ら機械を作るという授業を行なっていた。日本の中学校の選択授業より環境が整っていた。そんな中でも日本の教師はドイツの学校と同じように選択授業を行わなければならない。その時にどのような授業展開や、機材がない中でどのように工夫することができるかなど、同レベルの授業を行うためにどのような工夫をするべきかが課題としてあがった。次に2つ目として、授業力である。ドイツでは学生の段階から子どもたちと触れ合ったり、授業の一環として子どもたちに授業を行なったりと授業に携わることが多いと感じた。ドイツ研修を通して授業により多く携わることで慣れや知識を身につけることが大切だと感じた。</p> | |

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 教育学部理科専修2年

氏名: 柚木 咲乃

| | |
|---|--------------------------|
| 授業科目名 | 理科教育特講 |
| 研修先(国・地域) 滞在地 | ドイツ連邦共和国 |
| 研修期間 | 平成29年 2月 18日(土) ~ 28日(火) |
| <p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>ドイツの子どもたちの授業を参観して感じたことは、子どもたちが自分たちで考える学習を多く行っていたということである。日本は、教師が知識を与えるために一方的な授業を展開してしまうことが多いと感じる。それでは子どもは受身で授業を受けることしかできず、積極的な学習にはつながらないのではないかと考える。しかし、ドイツの授業のように自分で考え、友達と意見を交換し合いながら答えを導こうとすることで、子どもたちの学習に対する意欲が上がり、コミュニケーション能力もより発達するのではないかと感じた。自分が教師になったとき、子どもたちが考える授業を展開できるようになるうえでとても参考になった。</p> <p>また、ドイツ人の他人を配慮する心の素晴らしさに気づくことができた。例えばバスを障害者が乗り降りする際は、乗客自ら手伝いをしていたということが挙げられる。加えて、スーパーや小売店を利用する際、会計前には挨拶を、会計後にはお礼をよく交わしていたということが挙げられる。どちらも日本ではあまり見られない姿であったので新鮮さを感じるとともに、温かさを感じた。日本人よりも他者への配慮が行き届いている気がした。</p> <p>だから自分も挨拶を交わすようにし、機会があれば困っている人に手を差し伸べられるように気を配るようになった。このように、場所が変われば文化や建物、人が全く異なっていることを改めて実感することができ、異文化に対する、さらなる興味が湧いてきた。それぞれの文化が、全て満足するものを持ち合わせているわけではないし、なかなか順応することができないこともあると考える。しかし、それら自体が異文化を学んでいくうえで生じる難しさであり、面白さであるのではないかと感じた。異文化に触れることの楽しさに気づくことができた。</p> | |
| <p>〔研修後の抱負〕</p> <p>これから、日本国内にいても外国人と交流する機会が多くあると考える。まずは、英語をもっと勉強し、英会話力をつけたいと思った。また、訪問した建造物の歴史やその土地の文化を今後、さらに調べてより詳しく理解し、考えるようにしたいと考えている。</p> <p>このように、いままで行ったことのない場所を訪れることによって今の自分に何が足りなくて何が必要なのかを考えることができる。だから、これからも積極的に様々な場所を訪れ、様々な文化の触れてみたいと思う。</p> | |